



～シーズン2「清シス・アピール」

エピソード 14 : 境界を歩きたいし歩いている

しすてむ♥きよたけ

ごあいさつ

開いてくださり、ありがとうございます。
今回は、前半はぼくがどんな人であるか…いや、ぼくのあたまの中を描いている。フリーとして働きはじめ、3年目。改めて見直している最中であり、先に進んでいる最中でもある。学会のマガジンなので、ちょっとどっかイッてるやつと思うかもしれない。後半は、ここ最近起きたことを。あまり好きではない言葉である「老害」と「ぼくと周辺」だ。

清武ってどんなひと？

序；ぼくの頭の中

今、ぼくは、ベランダでぼんやりしている。見えるのは、電線。聞こえるのは、日本人ではない子どもがはしゃぐ声。それらの隙間をつまづくかのように、ぼくの頭に浮かんでくる絵。自分の人生を現しているかの

ような、暗闇と明るさの水玉模様。その中に、我慢と進むが一度に過ぎる。それぞれをつなぐ文字、for what。ぼくの頭は、文章？文字ではなく、マインドマップのようにキーワードとその理由が連なり合い、うごめいているのだ。

1；動いて知る社会

清武システムズは、今の時代になんらかのニーズはあると思う。でも、苦戦している。ニーズがあると思うのは、社会にいる僕ら、人間は、世代や生きてきた過程が違うよう、そもそも違う生き物だから、同じ所属ではない、違うという清武の存在が役に立つことがあるように思うのだ。

例えば、集団になると、結束力が高まる。その場の方向性や規律があり、それに対してコミットをしていく。理由は、成果を求められ、(他者からの)評価があるのだ。自

分は違うのに…と思ったとしても、同化していくと、当然思考は同じになる。一方で、言いたいけど、そこから外れることを避けるため、排除されないような振る舞いをしていく。そう…排除されてしまう可能性がある構造が、この世の中には潜んでいるのだと思う。

そこで、どこにも所属しない、独り身から始めている存在が機能することがあるのではないかと思うのだ。硬直している現場で、何か変化を求めているところには、異質な人物は、入るだけで、ことの変化は起きる。違いの可能性に自分で賭けていると言っても過言ではない。

2；存在が既存システムに影響を与えてしまう

しかし、苦戦しているのだ。この実体験は、ほかのエピソードにも記載したかもしれないが、これまで失敗したと思っている一つに、既存の仕組みに大きな影響を与えてきた。いや、与え過ぎてしまっていたのだ。そこから見えてきたことを下記に書いてみたいと思う。

この人は何かしてくれる人だと思ったけど、そうではない！？自分たちにも何かしていかないと変わらないのでは！？と思われてきた。つまり、多くの外から誰かを呼ぶ意味は、まず、内部に課題や問題があり、それにアプローチをしてくれると思っているシステムが出来上がっているのだと思う。しかし、ぼくの場合は、そうではなく、何

かちょっとした会話や振る舞いをキャッチしながら、基準は不確かだか、面白いと思ったことに反応する。応援したいことを応援しているのだ。この振る舞いは、他者が、いや今の社会が外部から人を呼び、求める解決アプローチとは違うわけだ。

だから、そこには、齟齬がある。しかし、あれ！？自分たちはどうしたらいいのだろうか？という思考の変化に触れていく。そこから、僕の本番なのだが、至らずに終わっていることに少なからず後悔は残る。

3；影響を与えすぎてからが本番

影響を与えすぎてしまったが故に終わるのなら、まだまだだと思うとこだ。しかも、繰り返すと、自分をどのように売り出していったらいいのかさえ分からなくなっていく。

というのも、一人で頑張ってみるという期間を設けたことで気づいた。一時、誰にも相談せずに考えてみていたのだ。

この時期、拠点を雑踏である東京一本に絞った。一つ契機だと思うので、ここから振り返ることをしてみた。

4；恐れずに動く

これまでは、人脈というネットワークにいた。東京でも、ないわけではないが、まだ口コミになる形はできていない。あえて言うなら、これまでは、信頼ある人が繋いでくれていたので、成り立っていたのだ。それがなくなれば、なんでもないのであれば、今は、自分のビジネスは、どのような社会

の中で、どのような位置にいられるのか見直さなければ、何にもならないと気づかされている時期だと思った。さらに、面白いと思うネットワークには、まだまだ乗れておらず、動きが止まっている。受動的すぎなので、能動的に変えていく時期がやってきた、というわけだ。

～カタチにしたいこと～

振り出しに戻ったようだが、束縛のような集団でなく、誰かに媚をうって生きなければならないようなところには居ないと思うと、心地よいとも思う。こういう人間が生きやすい社会システムがあるといいな…と思いき自分現実的にできることを試行錯誤している。ただ、まだ、何も手にしてはいない。

～検証中～

改めて記載するが、自分と相手が感じる違和感は、社会に潜んでいる構図に何か一口噛むことができなくはないのでは？と思っている。自分なりのロジックは見出せてはいないが、人は、疑問に思いそこから先に動こうとするモノだと思う。それが、どのようにしたら動き出すのか、実験台はぼく自身だ。

5：お金を出そうと思うか否か

個人的には難点もある。ビジネスとしてどうやっていくのか、だ。

想像してみたい。あなたの現場に呼ぶ場合、清武システムズに払うお金は何に

対してか？を。言い換えると、世の中、人にお金を渡すことはビジネスにはならない。お金は、人が何かをしているコト、売るモノ、ノウハウなどに支払われる。そうした明確なものは、今のぼくにはない。

その無さを売りにしているが、新しすぎるから、イキナリHITすることはない。相当な時間がかかりそうだし、何か考えて動き始める時期に来ているようにも思う。

6：僕の特性 致命的に欠けた文章能力

さてさて、今回も、描いて（書いてるつもりがない）いったらこうなった！をお届けしている。急にこんなことを言うのは、ぼくにはお作法がないので、作法があるのにそれに乗らない、乗れない清武を例に出しているのだ。

ぼくは、ほんとうは、ちゃんと書けるようになりたい。物を書いているのに、致命的なことにも…文章能力がない。

そこで、文章を書くお作法を読むと、だいたい、テーマを先に決める、そこに合わせて書くようだ。もしくは、書いて、テーマを決め、整理をする。中身は、起承転結。一文は、長くなりすぎずに、分かりやすく。

だが、ぼくは、当てはまっていない。むしろ、できない。だから、読み手は、だからなんだ？と思うかもしれない。

作法は、社会的に暗黙のルールのようになっていて、基盤に相互了解が生まれる。だが、違うと何なのか不明で、嫌になったり、邪魔くさくなる。

それをぼく自身が分かっているなら、ぼ

くが、作法に合わせればいい。読んで欲しいと思っていないわけではないから。そして、社会的に位置付こうと思うならルールに従えばいいのだ。でも、どうしてもできない。

7；文章でリアリティに触れた時期

これらを通して見えるぼくのこと。会話に慣れすぎて、書くということや論じることから随分逃げて生きてきた。

本を読みはじめた年齢は20代後半。伊坂幸太郎さんの本を随分読んだと思う。流し読みのようなものだっただろう。

いろんな人が、同じ時間に違う出来事に遭遇していく。意図している人もいれば、していない人もいる。そんななかで、人がモノゴトに出くわしていくあり様が、リアリティを持っていた。ぼくが、伊坂幸太郎さんにはまったのは、リアリティに触れていたからだったのだ。

7；集中力無しの才能

ぼくの特性？として、何か1つに集中していることはない。ぼくは、なにか1つに集中してやることができない。

なんとなく過ごしているなかで、ふと、目にとまることや聞こえてくるものが、無数にある。その無数の中でも、選んで残っていく。それを、ぼくは、表したいと思っている。仕事にも活かしていきたいと思っている。(何かの専門性がある人ではないです！)

あれこれある世の中は、ぼくの間感としては、片付けられず散らかしたままの部屋。そうだ。片付けようとなんかしなければ、飄々と生きていけるだろうに。これしかない！だなんて思うから、見えていることも見失うことだってあるだろう。

だからか、何か一つを極めていくルールにのってこなかったぼくには、いろいろなことに触れること自体が、とても生きやすい。

でも、今の時代は、わかりやすく、コレです！という世の中だと思っている。批判ではない。随分昔は、なんらかのルールにのれない自分に対する劣等感も、もっていたと思う。

8；ハマらないひと

人生、先に決まっていることなんて少ない。目指しているとおりになるだなんてことも少ない。そんな体験をしてきたし、目指していても、違うと思って修正することだってある。ぼくが、まだ、何かにハマったことがないだけなのかもしれないが。

●日常生活で起きた老害

1；老害なんてクソ喰らえ

ハマらないから適当にできることもある。イキナリの例えだが、「老害」対応。新居のオーナーのご主人が高齢で、少々認知症の持ち主だ。よく建物の掃除をしているし、入居者が入るとなれば、部屋への

受け入れ準備を自らしているようだ。だが、浮いたフローリングをビニールテープでくっつけてあったり、スライド式の扉は開けにくいままだったり。なにかと不備が多い。遂に、風呂に浸かったあと、湯を流せば、洗い場に湯が湧き上がるといった排水溝詰まり…。

それを話しに行けば、早朝から部屋に入り込んで来ようとするし、勝手に入って来ようとすることも起きてしまった。遂に、ぼくと相方の奥野はしびれを切らしてしまっていた。というのも、仕事や学校に遅れそうになり、奥野はなんとか間に合った。だが、勝手に入られることは嫌だと2人で判断し、ぼくが家に残った。ぼくは、家の外での暮らしが変わったのだ。家に居ないと勝手に侵入される可能性が2人にとって気持ちがいいものではなかったための判断だったので、それはそれでよしではあった。

2；やり過ごしてしまえ！

では、老害ということばかり、なにがおきているのか。言葉を通して振り返ってみた。

まず、ぼくらは、自分たちだけで解決できるわけでもなく、そして、今後も考え、オーナーの上にいる、管理者でもある仲介者に相談にも行った。あの爺さんはダメ呼ばわりだった。

確かにそうだと思う。境界線がなく、あったとしても了解されてないものだ。オーナーであるからいつでも入ってよし！ではないのが一般的だからだ。認知症だとはい

え、家の中まで入って来ようとする、時間帯を気にせず訪ねてくることは、了解されていない。むしろ、抑制や制御、予防をする傾向が、世の中にはある。

しかし、ぼくはやり過ごしてしまい、うまいこと回避することも可能なのでは？と思った。

突然部屋に入ってこようとするといった、抑制の無さはどこから来ている？と思ったのだ。ポイントは、建物について何かあれば出てくる人だと思ったので、建物を大事にしてきたし、今もそういう人なのだろうと思ったこと。

そこで、たまたま廊下で会ったとき「ぼくも掃除をしようと思っていたんですよ～嫌いじゃないし、大事にしてるんでしょ？」と話した。そしたら、何か気分よさげに、奥野に謝罪をしてきたらしい。

認知症である自覚がない人。自覚すること、受け止めることが難しいこと。そうだろうな～と思う。自分は自分で、いつどのタイミングで変わってしまったのかだなんて、認知症じゃなくても難しい。認知症だから、どうこの対応が大切な一方で、認知症でもそこに触れずに過ごせる周囲、周囲が変わることも日々の生活の上で大事なのだろう。

3；境界線の上を歩いていたい

上記を書いたのは、人がなんらかにカテゴライズされると、他者は色眼鏡で見えてしまう。それだけを見てしまい、対応してしまうことがある。そうすると、お互いが本

当に大切にしたいことは何かを、マーブリ
ングの絵の具のように一つの水の上で合わ
せていくことは難しいのだと思う。ぼくは、
そうできない状況は望んでいないのだ。

専門家でもないぼくが、これらの願望を
言ってもなんの力もない。専門家がいるか
ら、なにも持ってないぼくが、介入できる。
専門家でなくても、役割があると入りやす
い。そういう時代なんだと思う。

だが、非専門家や役割をもっているが、
直接的に相手側とは関係のない場合。これ
は、普段の生活では多い。街中を歩いてい
ても、一つのビルディングの中で暮らして
いても。

だから思う…役割がなくても、隠れてい
るときでも、困難をやり過ごしながら、適
度に相手と関わり、お互い知り合っていけ
たらいい…と。

終；生きづらい時代に入ってしまった？

なんとなく思う。これから、どんどん生
きづらくなるのでは？と思う。関係性やカ
テゴリーに捕らわれた集まりの中に入れら
れてしまうかのようで。

ぼくは、そんなことから、逃げてしま
うかのよう。でも、逃げずに済むような
装置として動いていきたい。境界線の上を
上手に歩いていきたいとぼくは思っている。
そして、それを関わる相手先に還元でき、
ぼくも刺激をもらえて嬉しいと思ってき
たのだと思う。

綴り人/しすてむ・きよだけ

通りすがりの旅人です。 [清武システムズ](#)という
看板を引っさげ、お仕事中。めんどくさいことも
起きるけど、そこから面白く展開していこうじゃ
ないか！「何か変化を求めているが、手立てがわ
からない。」そんな時に部品の1部だと思って、ぜ
ひ導入を！お願いします。